

# ソウル大学校蔵『源氏物語』(貴3201/60B)の書き込みについて

吳美寧\*

## 〈 Abstract 〉

### A study of annotation on *Genji-monogatari*(貴3201/60B) possessed by Seoul National University

The manuscript of *Genji-monogatari*, possessed by Seoul National University (SNU manuscript, hereafter) can be referred as an annotative text or high-level textbook, because it is written with high usage of Chinese characters and is easy to understand. One of the characteristics of the SNU manuscript is the many annotations on the text with red and black ink conveying additional indication. Especially, there are a variety of linguistic information in black ink annotation. The frequency of these annotations are not distributed evenly and vary by chapter. This paper reports the concrete examples with black ink annotations on the 3 chapters (Suma (12th chapter), Akashi (13th chapter), Miotsukushi (14thchapter) because there are many annotations in these chapters.

There are 1288 examples of annotations with black ink on the 3 chapters. These annotations consist of annotations about correction of text (248 examples) and annotations about orthography and pronunciation (1035 examples). Also, there are 5 examples of annotations with two or more types of linguistic informatio noted on the same character.

First, annotations that are related to the text correction consist of alternative version mark (24 examples), additional mark (103 examples), and deletion mark (121 examples). These examples show well thet annotator's efforts to elevate the accuracy of the text.

Then, annotations that are related to orthography and pronunciation consist of sonant mark (460 examples), non-voiced sound marks (75 examples), Katakana marks beside the Chinese character (468 examples), Katakana mark beside the Hiragana (29 examples), and Chinese marks beside the Hiragana (2 examples). There are in particular a large number of marks beside the Chinese characters and repeated signs, and Katakana marks beside of Chinese characters. These marks were affixed for pronouncing accurately when reading the text aloud.

Field : Japanese History

Keywords : *Genji-monogatari* possessed by Seonl National University, Annotation, *Genjimonogatari*,

Copied text of *Genji-monogatari*

## 1. はじめに

ソウル大学校中央図書館には源氏物語の写本が所蔵されている。(貴3201/60B。以下、ソウル大本。)<sup>1)</sup>

\* 崇実大学校 教授、日本語史

1) 2011年7月8日朴鎭浩先生(ソウル大学校国文学科教授)の案内で、小助川貞次先生(日本富山大学人文学部教授)、高

巻1桐壺と巻28野分を除く零本52冊である。横24cm、縦17.5cmの和装である。「八雲軒、藤亨、安元」などの印がある。<sup>2)</sup>この印からして、安土桃山時代から江戸時代前期を生きた武将・大名・歌人であった、脇坂安元(わきざかやすもと。1584-1654)旧蔵であることが分かる。八雲軒は安元の号であり、藤亨は別名である。官位は従五位下の淡路守であった。安元は武家第一の歌人ともされ、徳川秀忠の談伴衆でもある教養人であった。和漢書籍数千巻を所蔵していただけでなく、「下館日記」「在昔抄」など著作も多い。

このソウル大本は仮名資料であるが、仮名のみのもではなく、漢字の割合が高い。<sup>3)</sup>漢字を使用することによって、仮名のみの場合より、その内容を理解しやすくなる。物語の写本には、ただ単に物語を読み上げるためのものと、その内容の理解までをはかる学習本とがあり、ソウル大本は後者に属するものと判断される。

ソウル大本において、漢字使用率の高さとともに、もう一つ注目されるのは、〈図1〉でみるように、本文の上に補入や振り仮名などの少なくない書き込みが存することである。代表的な源氏写本である大島本<sup>4)</sup>を確認した結果、行間に何カ所か書き込みはあるものの、該当部分の内容のまとめのようなものが多く、書き込みの種類も少ない。

ソウル大本の書き込みを色で分けると、朱と墨の二種である。<sup>5)</sup>朱の書き込みは、文字の右肩に段落を示すものと思われる記号「㍑」と句読点<sup>6)</sup>などである。これに対して、墨では多様な書き込みが確認される。墨の書き込みは、異本注記・補入記号・見せ消ちなどの本文校訂に関わるものと、濁点・不濁点・振り仮名などの表記や発音に関わるものとに大別できる。

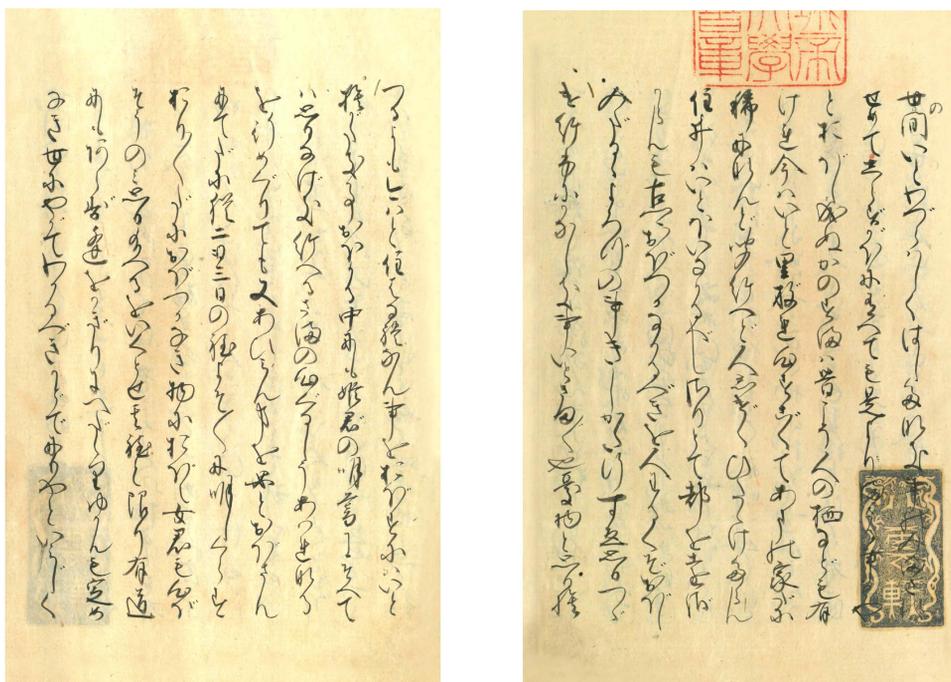
---

田智和先生(日本国立国語研究所准教授)とともに原本調査を行った。その後、ソウル大学校中央図書館で提供している画像(<http://sdl.snu.ac.kr/DetailView.jsp?uid=100&cid=560332>)をもって研究を行った。また2017年9月22日李丞宰先生(ソウル大学校言語学科教授)のご協力の上、斎藤達哉先生(日本専修大学教授)、渡辺さゆり先生(日本札幌大学教授)、保坂智(日本北海商科大学専任講師)とともに二度目の原本調査を行った。ご協力をいただいたソウル大学校の先生方々および中央図書館の担当者の方々に御礼を申し上げる。

本稿は、北海道大学文学研究科の後輩である高田智和さんに導かれたところが多い。彼は国立国語研究所の「海外に移出した仮名写本の緊急調査」という事業で、米国議会図書館蔵の『源氏物語』の調査を行い、その翻刻を<桐壺・藤裏葉><匂宮・夢浮橋><若菜上・幻>の三冊にわけて報告書として出している。また国立国語研究所のホームページに巻1桐壺巻12須磨巻36柏木の画像([http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji\\_image/](http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/))と、その全巻の翻字本文(<http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/>)とを公開している。同研究事業のメンバーである斎藤達哉先生には、源氏写本および本文に関することなど大事にご教示をいただいた。記して御礼を申し上げたい。

なお、2013年後期崇実大学校大学院日語日文学科の<時代別日本語研究II>という筆者が担当する授業において、ソウル大本の巻12須磨を中心に、文法分析と翻刻を行った。当時の学生は、鄭門鎬(日本北海道大学文学研究科博士課程)・金羅喜(日本神戸大学文学研究科博士課程)・崔孝珍(日本のIT企業勤務)の3人で、本稿の用例のまとめにも多いに協力してもらった。感謝の念を表するとともに、彼らの将来を祝福する次第である。

- 2) この他、巻末に「月明荘文庫」という古本屋の蔵書印が付いている巻もある。
- 3) 斎藤達哉先生によると、このソウル大本の漢字使用率は、源氏の板本のそれより高いという。
- 4) 源氏物語の写本としての大島本は、ほぼ全巻が揃っており、青表紙本系統の本文を持つ源氏物語の写本のうち、現存最善本とされている。現在出版されている『源氏物語』の学術的な校訂本は、ほとんどこの大島本を底本にしている。財団法人古代学協会・古代学研究所編、角田文衛・室伏信助監修『大島本源氏物語第3巻』角川書店、1996、pp.9-10。
- 5) 書き込みがいつなされたかに関する確実な証拠は得られなかった。
- 6) 句読点の中、文字の左下に朱点があり、それを墨でまるく囲んでいるものがあることに注目される。スペースの関係で文字と文字の間に付けられず、文字の左下に付けたものと考えられ、その朱点の存在を知らせるため、まるく囲んだものではないかと考えられる。このような句読点の状況から、朱を書き込んだ後、墨を書き込んだものと考えられる。



〈図1〉ソウル大本、巻12須磨の1丁表(右)・1丁裏(左)

しかし書き込みは全巻において均等であるわけではない。巻12須磨・巻13明石・巻14瀟標などのように、書き込みの密度が高い巻もあれば、巻35の若菜下以降のように、ごくまれにしか書き込みが見られない巻もある。書き込みの主体が所蔵者である脇坂安元であったかどうかは未詳であるが、いずれにせよ、よく読まれていた巻、あるいは一般的に人気のあった巻には書き込みが多いことが予想される。

本稿は、ソウル大本の中、書き込みの割合の高い巻12須磨・巻13明石・巻14瀟標の三つの巻を対象に、墨で書かれた書き込みについて調べ、その全貌と詳細を報告するものである。これによって、ソウル大本の存在を世に知らせたいと思うわけである。

## 2. ソウル大本における墨の書き込み

前述のように、ソウル大本における墨の書き込みは、大きく本文校訂に関わるものと表記や発音に関わるものがある。前者には異本注記・補入記号・見せ消ちがあり、後者には濁点・不濁点・振り仮名などがある。このような書き込みからは、当時の大名階級の学問レベルがうかがえると言えよう。

以下、ソウル大本における書き込みを分類し、該当用例数を〈表1〉に示す。二つ以上の書き込みがあるものは〈その他〉と分類した。

〈表1〉ソウル大本の三つの巻における墨の書き込み

	番号	書き込みの内容	12須磨	13明石	14濔標	合計
本文校訂に 関わるもの	1	異本注記	10	6	8	24
	2	補入記号	41	39	23	103
	3	見せ消ちのみ	56	5	9	70
		見せ消ち+a	21	11	19	51
表記や発音に 関わるもの	1	漢字の上に濁点	88	61	37	186
		繰り返し符号の上に濁点	109	89	76	274
	2	不濁点	20	25	30	75
	3	漢字に振り片仮名	131	208	130	469
	4	平仮名に振り片仮名	9	10	10	29
5	平仮名に振り漢字	1	0	1	2	
その他			3	1	1	5例
合計			489	455	344	1288例

下記の考察から明らかになるように、前者からは源氏本文を完成度を高めるための努力が見られ、後者からは当本を読み上げる行為に役立てようとする努力がうかがえる。

## 2.1 本文校訂に関わるもの

### 1) 異本注記

写本の場合、一般にもととなるものがあり、それを写すことで成立する。異本とは通常、当の写本を写すときにもととなったものとは異なる別のテキストをいう。その両方の本文に相違がある場合、その内容を書き込んだものを異本注記という。

ソウル大本の三つの巻において異本注記が書き込まれているのは、巻12須磨10例・巻13明石6例・巻14濔標8例である。これらつまり、ソウル大本の本文とは異なる別のテキストの内容を書き込んだものである。異本の内容を書き込んだ後、その下に片仮名で「イ」と書き入れている。

たとえば、巻12須磨の3b9<sup>7)</sup>を見ると、「つれぐ<sup>8)</sup>にこもらせ給へ〈ふイ〉らん程なにと侍らぬ昔物」とある。これは「給へらん」のところを別のテキストでは「給ふらん」としているという情報を与えているわけである。この個所は、大島本には「給へらむ」(4a8-9)とあり、米国議会図書館本には「たまはん」(2b8)とある。<sup>9)</sup>また巻13明石の3a4には「我は〈らい〉いかなる罪をゝかして」とある。これは別のテキストに「我は」ではなく「我ら」と書かれているということである。この個所は大島本には「われはいかなるつみをををかして」(3b1)とあり、米国議会図書館本には「我はいかなるつみをををかして」(2b8)とある。

以下、巻12須磨の異本注記の用例を〈表2〉に示す。

7) 以下、用例を示す場合、「巻:丁表(or裏)行」の順に示す。表はa、裏はbと示し、他は数字で示す。

8) 縦書きの複数文字の繰り返し符号を「く」と示し、それに濁点が付いているものは「ぐ」と示す。

9) 国立国語研究所のホームページ米国議会図書館蔵『源氏物語』画像[http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji\\_image/](http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/) (巻1桐壺・巻12須磨・巻36柏木)

〈表2〉ソウル大本の巻12須磨における異本注記の用例：10例

	位置	用例	もとの本文：異本の本文
1	3b9	つれぐにこもらせ給へくふイ>らん程	給へらん：給ふらん
2	8b8	所ぐ引かへしたるくりイ>みる程だに	引かへしたる：引かへしたり
3	18b2	よろづをしはかりて<フ <sup>10</sup> イ>けいし給へ	をしはかりてけいし給へ ：をしはかりことけいし給へ
4	20a2	数しらぬぐずイ>を思しらぬにはあらねど	しらぬ：しらず
5	22a8	かゝるくらぬイ>おり	かかるおり：かからぬおり
6	29a2	御心ぐみ給ふに<はイ>	給ふに：給ふは
7	38b7	まよくとイ>ひなん	まよひなん：まとひなん
8	42b1	いかづはせむとおぼしなしくりイ>て	おぼしなして：おぼしなりて
9	44a2	はる<わつイ>かなる<見せ消ち>る	はるかなる：わつかなる
10	44a7	あかくちきイ>なくにかりのどこよを	あかなくに：あちきなくに

## 2) 補入記号

補入記号は〈図1〉に挙げた巻12須磨の1aの冒頭においてさっそく確認できる。1行目の最初の2文字である「世間」の間に小さい「○」が見え、その右横に「の」と書かれている。「よのなか」の「の」を示したものであろう。つまり「せけん」と読んではならず、「よのなか」と読むべきものとなる。この個所は、大島本には「世中」とだけあり、米国議会図書館本には「世の中」とある。

補入は写本においてもよく見られるものである。大島本にも少なくない補入があり、ソウル大本のよような補入記号を用いているところもある。

ソウル大本において、補入記号が付されているのは、巻12須磨に41例・巻13明石39例・巻14濤標23例である。上記の例のように仮名一文字の補入が割合多いが、漢字一文字のものもあれば、巻12須磨23b2の「中なるに」や41b7の「あまり」の補入の例でみるように、二音節以上のものもある。

また補入された仮名には濁点や不濁点が付いているものもあれば、漢字に振り片仮名が付いているものが補入されたところもある。さらに注目されるのは、補入される文字の下に前項で考察した「イ」という異本注記を伴うものが見られることである。このような例は全部で11例が確認される。<sup>11)</sup>以下にそのうち2例を前後の文脈とともに挙げる。参考までに大島本と米国議会図書館本の本文をも挙げる。

## \* 補入される文字の下に「イ」という異本注記があるもの

- 〈ソ12:6b9-6b2〉花の木どもやうく盛過ては(ママ)つかなる木陰のいと<○おもイ>しろき庭にうすく  
 〈大12:7b1-3〉花の木ともやうくさかりすきてわつかなるこかけのいとしろきにはにうすく  
 〈米12:4a6-7〉花の木ともやうくさかりすきてわつかなるこかけのいとしろきにはうすく

- 〈ソ13:24b3-4〉源氏の御事也けんかし <○いとおそろしうイ>いとをしとおぼして  
 〈大13:28b9-10〉源氏の御事なりけんかしいとおそろしういとおしとおぼして  
 〈米13:16a7-8〉源氏の御事なりけんかしいとおそろしういとおしとおぼして

前者の巻12須磨の例は、補入以前の段階では「いとしろき」と大島本や米国議会図書館本の本文と一

10) 「こと」の合字「フ」のように見えるが定かではない。ここでは一応「こと」と読んでおく。

11) 12:6b1[おもイ]、12:29b4[をイ]、13:24b3[いとおそろしうイ]、13:27a2[のイ]、13:27a6[二イ]、13:41a8[はりイ]、14:4a5[しろ髪もイ]、14:5b8[わたくし伊]、14:17b1[し伊]、14:19b8[ほかイ]、14:24a2[のイ]

致していたものの、補入によって「おもしろき(ノ)：しろき(大・米)」の対立が生じてしまうところに注意される。これに対して後者の巻13明石の例は補入によって、三種の写本の本文が同じくなる。

### 3) 見せ消ち

見せ消ちとは、該当文字の削除を示すものである。ソウル大本では文字の左側に点を二つ付けて示しているのが普通であるが、まれに左に「ヒ」と書かれたものもある。<sup>12)</sup>上記の〈図1〉の1b5の「二日三日」の最初の「日」の左に点が二つ付いている。これが「日」を消して読むことを示す見せ消ちで、これによって該当本文は「二日三日」ではなく「二三日」となる。この個所を大島本で見ると、〈図2〉の1b8でみるように「一二日」とあり、本文の相違が確認される。米国議会図書館本においても大島本同様「一二日」である。

上記の例のように見せ消ちのみ付いている例もあれば、見せ消ちとともに仮名や漢字、符号がともに記入されている例もある。後者を便宜上「見せ消ち+α」と称した。前者は、巻12須磨56例・巻13明石5例・巻14濤標9例であり、後者は、巻12須磨21例・巻13明石11例・巻14濤標19例である。特に須磨の巻において見せ消ちが多い。

以下、巻12須磨における「見せ消ち+α」の例を挙げる。

〈表3〉ソウル大本の巻12須磨における「見せ消ち+α」の用例：21例2.2 表記や発音に関わるもの

	位置	用例	書き込みによる本文
1	5b5	へだゝり給はんと思ひく見せ消ち+ふ>給ふく見せ消ち>	思ふ給
2	6a3	人にく見せ消ち+人ゝ>	人々ゝ
3	6a8	夜ふかうく見せ消ち+く>	夜ふかく
4	10a9	いとつきなかるべきもく見せ消ち+也>大やけに	べき也
5	16a2	思ふく見せ消ち+ひ>給へく見せ消ち>あはすることの	思ひ給
6	16b9	彼御く見せ消ち+み>そぎの日	みそぎ
7	20b7	いみじくく見せ消ち+う>おかしげにて	いみじう
8	22b9	いかで年月をすくく見せ消ち+ご>さましと	すごさましと
9	23a4	東宮のみく見せ消ち+御>事	東宮の御事
10	28b8	つきせぬ心ちし侍そく見せ消ち+な>どく〇ぞ>有ける	心し侍などぞ
11	29a7	恋く見せ消ち+京>のけいしの本に	京の
12	32a5	磯のたゝずまひ又く見せ消ち+に>なくかき集め給へり	磯のたゝずまひになく
13	33a9	なくかりを空く見せ消ち+雲>のよそにも	なくかりを雲の
14	34a2	のたまひく見せ消ち+はせ>し程	のたまはせし程
15	37b8	いと近うく見せ消ち+く>時々ゝ立くるを	近く
16	40a1	あなかたはく見せ消ち <sup>13)</sup> +わ>や	あなかたわや
17	40b2	人をしも思ひかけんにく見せ消ち+さて>も	思ひかけんさても
18	42b3	からめいたるく見せ消ち+り>所のさま	からめいたり所のさま
19	44a3	別をおしむべかく見せ消ち+かん>めり	おしむべかんめり
20	46b6	はらめきおつおく見せ消ち+か>くて世は	はらめきおつかくて
21	47a9	いともものむつまく見せ消ち+か>しう	むつかしう

12) 巻13明石の11a3[に]と11a8[り]とがその例である。

13) 見せ消ちは左に点を二つ付けることが普通であるが、この例は点の一つのみ付いている。書き込まれた平仮名「わ」は発音を示したものと考えられる。

## 1) 濁点

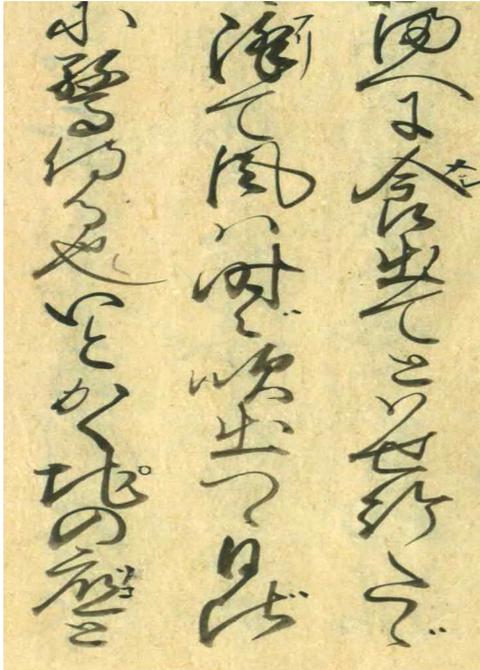
前掲の〈表1〉では漢字に付された濁点と繰り返し符号に付された濁点の二種類を挙げているが、〈図1〉で見ると、このほかに平仮名にも濁点が付いており、しかもその頻度も高い。これに対して大島本を含む源氏写本には濁点の記入がないのが普通である。

平仮名に濁点を付している例は、相当の数にのぼるだけでなく、のちの日本語表記の観点では一般的なもので、ここではとりあえず漢字と繰り返し符号に付された濁点、二種類に注目した。<sup>14)</sup>当然ながらこの二種の濁点も大島本や米国議会図書館本には見えない。

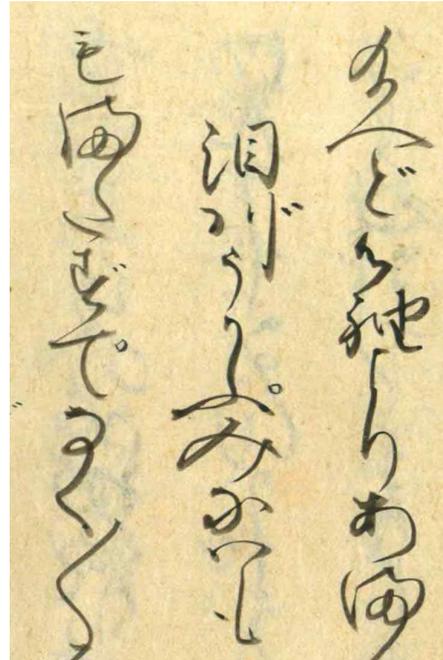
巻12須磨には漢字の上に濁点が付いている例は88例、繰り返し符号の上のものは109例であった。巻13明石においては前者は61例、後者は89例である。巻14濤標には前者が37例、後者が76例確認された。両方の濁点の中、繰り返し符号の上に付いた濁点の用例がより多い。また、濁音で読むべき箇所すべてにおいて濁点が付されているわけではない。

〈図2〉は巻13明石からの例である。真ん中の下には「日比」の「比」のところに濁点があり、これは「ひごろ」のように濁音で読まれるよう注意したものと思われる。そしてその上のほうに「時々」の「々」、つまり漢字の繰り返し符号の上に濁点が付いている。また〈図2〉の右下には「たゞ」とあり、仮名の繰り返し符号である「ゝ」の上に濁点が付いているのが確認できる。

このような濁点が付された状況は、書き込みを行った人が、本文を声を出して読む際に正確に発音できるように意識していたことを示すものと考えられる。



〈図2〉巻13明石2b4



〈図3〉巻12須磨15a3-5

14) 平仮名に付された濁点については今後の研究課題として考察していきたい。

## 2) 不濁点

不濁点は、該当文字を濁音で読んでではないことを示すものである。文字の右肩、つまり濁点の位置に小さい「〇」が付いているものがあるが、これが不濁点である。上記の〈図2〉の左の行には「いとかく地<sup>〇</sup>の底と」とあり、「地」の右肩には不濁点が付いているのが確認できる。これは「地」を「ち」のように濁音で読むことを警戒し、「ち」と清音で読むように指示しているのである。

〈図3〉は巻12須磨の15aの一部である。真ん中の「ふ」と左側の「て」の右肩に小さい「〇」のが付いていることが見える。これは「泪(なみだ)川(が)はうかふ<sup>〇</sup>みなはも消(きえ)ぬべしながれて後(のち)のせをもまたずて<sup>〇</sup>」のような和歌の中に登場するものである。従って前者は「浮ぶ」の活用語尾なので濁点が期待されるが、不濁点が付いている。これはおそらく濁点の誤りであろう。また後者に登場する「ずて」は「一なくて、一ないで、一ずに」の意味で、ここの「て」は接続助詞であり、「またずで」ではなく「またずて」と読むように不濁点を付けたものである。

本稿の考察対象である三つの巻に不濁点の用例は、巻12須磨20例・巻13明石25例・巻14湊標30例である。この中、巻12須磨の用例を〈表4〉に示す。

〈表4〉 ソウル大本の巻12須磨における不濁点の用例: 20例

	位置	用例	説明など
1	2b1	なをさ <sup>〇</sup> りにても	「ぎ」の誤り
2	5b9	さる事も侍けれとさ <sup>〇</sup> まかうざまく挿入符に>	さまかう
3	7b4	返 <sup>〇</sup>	かへすかへす
4	7b5	たぐにむすぼ <sup>〇</sup> れはべる程	結ばほれはべる程
5	8a6	へだ <sup>〇</sup> らん	へだたらん
6	15a4	うかふ <sup>〇</sup> みははも	「ぶ」の誤り
7	15a5	せをもまたずて <sup>〇</sup>	助詞「て」
8	20a4	よゆす <sup>〇</sup> りておしみきこえ	ゆすりて
9	22a3	同じ雲井か <sup>〇</sup>	助詞「か」
10	26b1	いまはことく <sup>〇</sup> に心あはたしう	「ぐ」の誤り
11	29b5	いかめしきことも出こしか <sup>〇</sup>	助詞「か」
12	39a2	かへすく <sup>〇</sup>	かへすかへす
13	42a9	つみにあたる共 <sup>〇</sup>	助詞「とも」
14	44a2	をのがじ <sup>〇</sup>	をのがじし
15	44b2	いばへぬべければなんと <sup>〇</sup>	助詞「と」/「なん」と
16	44b8	又たいめん[給はらんとすらんさり共 <sup>〇</sup> かくてや] はと申給ふに	助詞「とも」 [ ]大島本なし
17	45a5	たつ <sup>〇</sup> がなき	「づ」の誤り <sup>15)</sup>
18	45a8	思ひ給へらるゝおりおほくなんと <sup>〇</sup>	おほく「なん」と
19	45b7	ひとか <sup>〇</sup> たにやは	ひとかた
20	47a5	そのさま共 <sup>〇</sup> みえぬ人きて	助詞「とも」

〈表4〉で見ると、巻12須磨における不濁点の用例20例の中、4例は濁点を付すべきところに不濁点を付けていることが分かる。

以上の濁点や不濁点の書き込みから、ソウル大本は、源氏本文を正確に発音させようとしたことがう

15) たづ[鶴・田鶴]。おもに歌語。

かがえる。

### 3) 漢字に振り片仮名

前述のように、ソウル大本は漢字の使用率が高い。また漢字および漢語の右側に片仮名で振り仮名が振られているものが少なからず見られる。このような用例は巻12須磨131例・巻13明石208例・巻14霽標130例である。

用例には特に「御」の用例が多く含まれている。巻12須磨の場合は、漢字に振り片仮名の付いた用例の50%近くが、巻14霽標の場合は50%以上が「御」の用例である。その内訳は以下のとおりである。

〈表5〉漢字に振り片仮名用例の中「御」の用例: 167例(468例中)

	ミ	ゴ	ヲ	ヲホ	ン	合計
巻12須磨	55	3	3	×	1 <sup>16)</sup>	62例 (131例中)
巻13明石	38	2	2	×	×	42例 (208例中)
巻14霽標	66	6	×	1 <sup>17)</sup>	×	73例 (130例中)

このように漢字で書かれた「御」に対して正確な読み方で読ませるために相当注意していた様子がかがえる。

従って、「御」以外の用例は、巻12須磨68例・巻13明石166例・巻14霽標57例である。以下に、「御」の用例を除き、巻12須磨における「漢字+振り片仮名」の用例をあげる。

〈表6〉ソウル大本の巻12須磨における「漢字+振り片仮名」の用例(「御」の用例を除く): 69例

	位置	用例		連番	位置	用例	
1	2b8	三月	ヤヨイ	36	32b7	仏	ブツ
2	3a1	限	カギリ	37	32b7	弟子	デシ
3	3b2	限	カギリ	38	33a3	払	ハライ
4	4a8	天下	アメノシタ	39	33a9	常世	トコヨ
5	4b2	前	サキ	40	33b1	前	サキノ
6	4b3	官爵	クワンサク	41	34a8	恩賜	ランシ
7	4b8	濁	ニゴリ	42	34a8	有	リ
8	5b8	侍気	ハンバリケリ	43	34b2	左右	ヒダリミギ
9	9b9	弔	トフラ	44	34b5	逍遙	セウヨウ
10	10a1	恥	ハヅカ	45	35a2	帥	ソチ
11	10b7	帥	ソチ	46	35b1	人	ト <sup>18)</sup>
12	12a7	中	ナカ	47	36a1	知	シル
13	14a1	荘	サウ	48	38a1	気	ケリ
14	15a2	覚	ヲボ	49	38a3	賤 <sup>19)</sup>	ガツ
15	15a6	一度	ヒトタビ	50	38a4	冬	フユ
16	16b5	悲	カナ	51	38a4	降	フリ
17	20a5	弔	トムラ <sup>20)</sup>	52	38a4	荒	アレ
18	20b4	一日	ヒトヒ	53	38a6	横	ヨコ
19	20b4	二日	フツカ	54	38a8	胡	コ
20	21a6	終	ハテ	55	39a1	覚	ザメ

16) 御[ン]みづから(12:15b3)。「おん」あるいは「おほん」の最後の音節を示したものであろう。巻11花散里の2b7には「分」のところに「ン」だけが付いているものがある。

17) 「御[ヲホ]との」(14:28a2)。

21	22a7	廊	ラウ	56	39a1	床	トコ
22	22b1	荘	サウ	57	41a1	失	ウセ
23	22b8	知	シラ	58	41b7	二月	キサラギ
24	23b1	汀	ミギハ	59	43a2	念誦	ネンズ
25	28a3	折柄	フリカラ	60	43a8	向後	ユクエ
26	29a3	催	モヨホ	61	44a1	盃	サカヅキ
27	29a5	葎	ムグラ	62	44a1	諸声	モロコエ
28	29a8	荘	サウ	63	44a3	朝朗	アサボラケ
29	29b3	限	カギリ	64	45a9	一日	ツイタチ
30	29b3	息	ン <sup>21)</sup>	65	45a9	已	ミ
31	29b7	七月	フツ <sup>ク</sup>	66	45b3	軟障	ゼンジャウ
32	30a2	遊	アソビ	67	45b4	陰陽師	ランミヤウジ
33	31b5	片時	カタトキ	68	45b7	大海	ヲホウミ
34	32b1	前栽	センザイ	69	46b8	夜	ル
35	32b6	釈迦牟尼	シヤカムニ				

このように本稿では用例を挙げることに止まったが、「御」に振り片仮名が付いて用例を含む漢字に付された振り片仮名の用例については、今後より詳しく考察し、報告したいと思う。

#### 4) 平仮名に振り片仮名

上記の漢字に振り片仮名を付けることは、古今を問わず日本語の表記において普通に見られる現象である。しかし、ソウル大本には平仮名の横に片仮名で書き入れたものが見られ注目を引く。このような例は、三つの巻において29例確認できる。以下、巻12須磨の例をその音節を含んだ文字列を挙げ、片仮名が書き込まれた理由を考えてみたい。

〈表7〉ソウル大本の巻12須磨における「平仮名+振り片仮名」の用例：9例

	位置	用例	もとの本文：書き込みによる本文	説明
1	10b7	ごもれり<リ>	変化なし	文字の改め
2	14a1	りやう<らう>じ給	りやうじ給：らうじ給	発音
3	17a2	けづら<ラ>れ	変化なし	文字の改め
4	22a9	すさひ<ミ>	すさひ：すさみ	語形
5	24b7	おほ<ヲ>したて	おほしたて：おをしたて	発音
6	32a2	すさひ<ミ>	すさひ：すさみ	語形
7	32b9	うかべ<メ>ると	うかべると：うかめると	語形
8	33b9	みまもられ<レ>給	変化なし	文字の改め
9	38a5	引すさひ<ミ>給て	引すさひ給て：引すさみ給て	語形

上記の9例に片仮名が書き込まれた理由は、三つにまとめられそうである。一つは、もとの語形とは異なる語形を書き込んだもので、これに属するのは4例であり、そのうち3例は「すさぶ→すさむ」の例

18) 「くろう人」の「人」の右に「ド」とある。

19) 「山賤」の「賤」。

20) 文字の左側に書かれている。

21) 「ン」の上に若干の間隔がある。「御[ミ]息[ン]所」の例である。「みやすんどころ」と読み、「息」の読みである「やすん」のうち、「ん」のみを記入したのであろう。

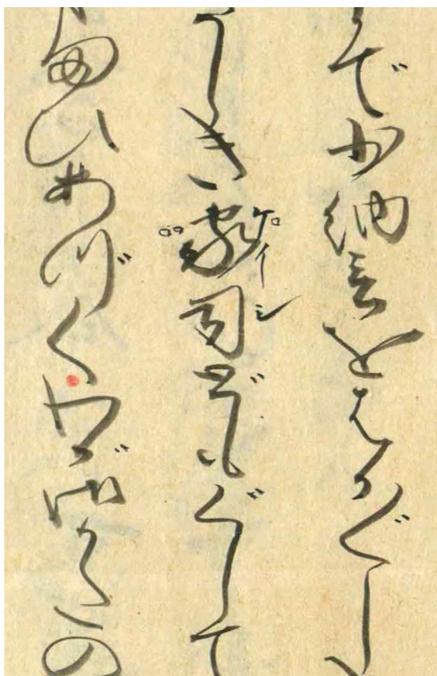
である。二つは、もとの平仮名と同じ音の片仮名が書かれたものが3例であるが、これはもとの文字の書き方が当該文字として読まれにくいと判断したものや難しいくずし字で書かれているものに、分かりやすく片仮名を書き込んだものと考えられる。三つは、発音を書き込んだのではないかと考えられるものである。「りやうじ給」の「りやう」は「領」であり、漢字音からは「らう」にはなれない。書き込んだ人の勘違いか、その人が属した地域の言葉によるなまりの可能性が考えられる。「おほしたて(る)」は「生ほすたて(る)」のことであり、「ほ」をハ行転呼音により「を」と読むように指示したものと考えられる。このように検討してみると、平仮名本文に書き込まれた片仮名は多様な役割を果たしていることが分かる。

#### 5) 平仮名に振り漢字

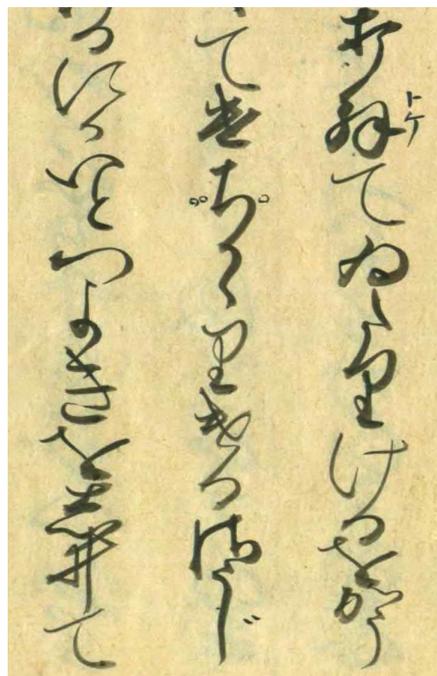
平仮名の右側に漢字が書かれたものも2例ある。巻12須磨に「まへ-前」(6a4)と巻14濡標に「きさい-后」とである。難解語とは言えないもののわざわざ漢字を付けていることに注目される。

#### 2.3 その他

「その他」と分類したのは全部で5例である。二つ以上の書き込みがあるが、上記の分類には入れられないものである。まず巻12須磨には3例が確認できる。



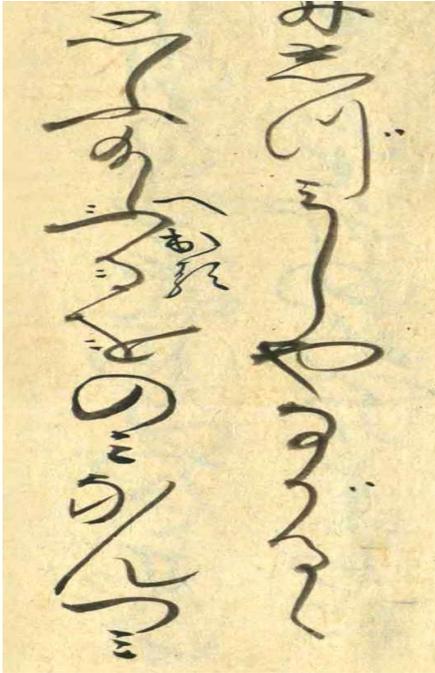
<図4> 巻12須磨14a4



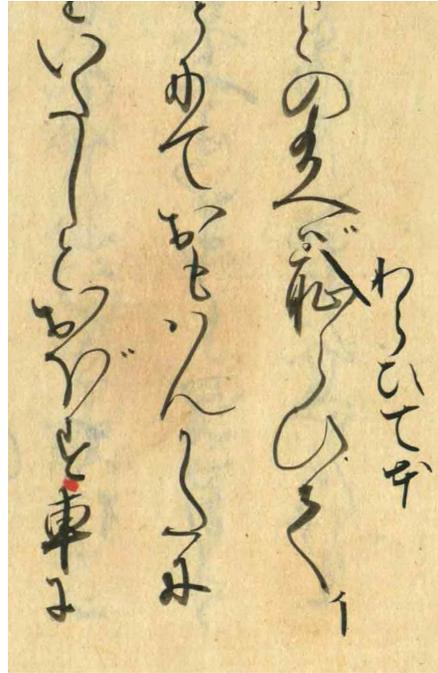
<図5> 巻13明石29a6

<図4>の巻12須磨の14a4の用例は「家司」の右には「ケイシ」と片仮名で振り仮名が付いている。しかもその「ケ」には不濁点が付いている。さらに左には小さい「〇」が二つ付いている。上声の位置に付いてはいるが、「家」の声調は平声なので、声点としてもふさわしくない。しかも「家」は濁音でも

ない。文字の左側にまるい点が二つ付いている例は、〈図5〉で見ると、巻13明石29a6に見える。しかしこれは仮名に付いたものである。これについては今後解明して行きたいと思う。



〈図6〉巻12須磨14b9



〈図7〉巻14濤標9a1

〈図6〉に挙げている巻12須磨の14b9は「思ふ給ふるをのみなん」の「ふるを」の左に各々見せ消ちがあり、「ふる」の右側に「へ出る」とある。つまり「思ふ給へ出るのみなん」と直したのであろう。大島本には「思給いつるのみなむ」(16b5-6)とあり、米国議会図書館本には「思給へ出のみなん」(9a9)とある。

さらに巻12須磨の22a8には「かゝるおりならず」の「す」には、左側に見せ消ちがあり、右側には「はイ」という異本注記があるのが確認できる。

巻13明石では「その他」に分類されたのは30a2に見える1例である。補入記号があり、その右に「御ミ」とあるものである。「御」を補入しただけでなく、その上に振り仮名も付けているわけである。

巻14濤標にも〈図7〉に示した1例がある。これはもとの本文に書かれた「恥らひて」の右上に墨で逆斜線を引き、下の方に「イ」という異本注記を書き込んでいる。そのうえ右に「わらひて本」と書いているものである。

### 3. おわりに

ソウル大本は、漢字使用率が高く、これによって内容の理解を図る注釈的本文あるいは高度学習本と

いべきものである。ソウル大本には朱と墨の書き込みが多く見られることもその特徴である。特に墨によって多様な書き込みがなされている。書き込みは巻による偏りが認められ、本稿では書き込みの多い巻12須磨・巻13明石・巻14澪標の三つの巻を対象に、墨で付けられた書き込みの詳細を調査し報告した次第である。

墨の書き込みは、三つの巻において1288例確認される。これは本文校訂に関わるもの(248例)と表記や発音に関わるもの(1028例)とに大別できる。このほかに二種以上の書き込みがあるもの(5例)もある。このような書き込みは、当時の大名階級の学問レベルを表わしているものと考えられる。

本文校訂に関わるものには、異本注記(24例)・補入記号(103例)・見せ消し(121例)がある。この用例からは、本文の完成度を高めるために力を入れていたことがうかがえる。

表記や発音に関わるものには漢字の上、そして繰り返し符号の上に付された濁点(460例)・濁音ではないことを示した不濁点(75例)・漢字に付けられた振り片仮名(468例)・平仮名に付けられた振り片仮名(29例)・平仮名に付けられた振り漢字(2例)がある。漢字の上、そして繰り返し符号の上に付された濁点と漢字に付けられた振り片仮名の用例が特に多い。これらの用例は、書かれた本文を声を出して読む際に、正確に読ませるために付けられたものと考えられる。

## 【参考文献】

- 伊藤鉄也(2002)『源氏物語本文の研究』おうふう pp.9-362
- 大内英範(2013)「『青表紙本』が揺らいだ後:これからの源氏物語本文研究」『文学・語学』(全国大学国語国文学会)206 pp.130-139
- 源氏物語別本集成刊行会編(1990)『源氏物語別本集成第3巻』桜楓社 pp.473-493(花散里)・495-712(須磨)
- \_\_\_\_\_ (1991)『源氏物語別本集成第4巻』桜楓社 pp.5-187(明石)・189-337(澪標)
- 斎藤達哉・高田智和編(2010)『米国議会図書館蔵の『源氏物語』翻字本文 桐壺-藤裏葉』(平成22年度人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」報告書)人間文化研究機構国立国語研究所 pp.1-425
- \_\_\_\_\_ (2010)『米国議会図書館蔵の『源氏物語』翻字本文句宮-夢浮橋』(平成23年度人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」報告書)人間文化研究機構国立国語研究所 pp.1-303
- \_\_\_\_\_ (2010)『米国議会図書館蔵の『源氏物語』翻字本文若菜上-幻』(平成24年度人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」報告書)人間文化研究機構国立国語研究所 pp.1-192

## 〈요지〉

## 서울대학교 소장 『源氏物語』(貴3201/60B)의 注記에 대하여

서울대학교 소장 『源氏物語』(이하, 서울대본)는, 한자사용율이 높고 그로 인해 내용을 이해하기 쉽도록 한 주석적 본문 혹은 고도학습본이라고 말할 만한 겐지모노가타리 텍스트이다. 서울대본은 朱와 墨으로 본문 위에 여러 가지 내용이 다수 기입되어 있다는 점도 특징적이다. 특히 먹으로 다양한 언어 정보가 기입되어 있다. 이러한 언어 정보의 기입은 전체에 걸쳐 일률적이지는 않고 권에 따라서 많이 기입된 것도 있고 전혀 기입된 것이 없는 것도 있다. 본고는 주기의 기입량이 많은 卷12須磨·卷13明石·卷14濡標의 세 권을 대상으로 墨으로 기입된 注記에 대해 조사하여 보고한 것이다.

墨으로 기입된 注記는 卷12須磨·卷13明石·卷14濡標의 세 권에서 1288예가 확인된다. 이것은 크게 본문 교정에 관련이 있는 것(248예)과 표기 및 발음과 관련이 있는 것(1035예)으로 나눌 수 있다. 이밖에 2종 이상의 언어 정보가 기입된 것(5예)도 있다. 이러한 언어 정보를 통해 당시의 다이묘 계급의 학문 레벨을 짐작할 수 있다.

본문 교정에 관련이 있는 것은 異本注記(24예)·補入記号(103예)·見せ消ち(121예)가 있다. 이 용례로부터 본문의 완성도를 높이려고 노력했음을 확인할 수 있다.

표기나 발음과 관련이 있는 것에는 한자나 반복부호 위에 기입된 탁점(460예)·不濁点(75예)·한자에 기입된 振り片仮名(468예)·平仮名에 기입된 振り片仮名(29예)·平仮名에 기입된 振り漢字(2예)가 있다. 한자 위 그리고 반복부 위에 붙여진 탁점과 한자에 振り片仮名이 기입된 용례가 특히 많음을 알 수 있다. 이들 용례는 본문을 소리를 내어 읽을 때 정확하게 발음할 수 있도록 하기 위한 것으로 생각된다.

논문분야 : 일본어사

키워드 : 서울대본겐지, 주기(注記), 겐지모노가타리, 겐지사본

### ■ 오미영 (吳美寧)

崇実大学校 教授、日本語史

id-omy@hanmail.net

- 投稿日 : 2017년 9월 28일
- 審査開始 : 2017년 10월 22일
- 審査完了 : 2017년 11월 27일
- 掲載確定 : 2017년 11월 24일